

素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS



木乃子増緒

KINOKO MASUO

ボルさん

エンシェントドラゴン
地底に住む古代竜。
でかい。

タケル

ひょんなことから
異世界で「素材採取家」
となった本作の主人公。
食べることと
お風呂が大好き。

ビー

タケルと共に旅を
することになる
ドラゴンの子供。
タケルとカニが
大好き。

クレイドン

顔の怖い
リザードマン戦士。
こう見えて
情に厚いタイプ。

モンブランクラブ

タケルとビーの好物。
見た目はアレだが
味はタラバ。美味い。

謎のエルフ

タケルが森で出逢った
奇妙な騎士。漂う空気は
涼しげだが……

主な登場人物

1 はじまり

よくある普通の日常。

朝起きて、いつものテレビを観ながら支度しとくをして。

家を出て、いつもの通勤電車のいつもの車両に乗って押しつぶされて。

会社でいつものように仕事をこなし、いつものように仕事を終え、いつものように帰宅。

それが、日常。

ときどき電車の遅延や交通渋滞、ちょっとしたトラブルに見舞われることもあるけど、でもやっぱり何も変化は起こらず日々は過ぎていく。

そうやって毎日を送り、だけど不平不満はなかった。

日常がつまらないのはいいことだ。

仕事があつて、屋根のある部屋で温かい布団で眠れる。趣味があり、それに熱中できる。

たまにテレビドラマなんかで平凡な毎日がつまらないと嘆くOLとかが出てくるが、お前バカじゃねーの、そんなお洒落しゃれな部屋で生活しててイケメンが同僚にいてこれ以上何を望むわけ？ ア

ラブの石油王にでも嫁ぐつもりか？ と、うすら笑ってしまう。

当たり前の日常を当たり前に送るということが、実は一番の幸せなのだ気づいたのはいつのことだろうか。

五体満足で生きていられることが、既に幸せであるのに。

だけどほんの少し。ほんの少しだけの非日常。

それを望んでいる俺も、確かに存在するのだ。

＋ ＋ ＋ ＋

「そんなこと思っていた俺をぶちたい」

誰もいない白い空間で、俺は呆然と立ちつくしたまま独り言を呟いた。

白い空間と言うには多少語弊はあるが、基本的に白い。

雲のような霧のような、そんな中にある感覚。

都心部で前が見えなくなるほどの濃霧などありえないから、コレたぶん夢だよねと結論。

夢にしてはぼんやりしてなくて、意識がはっきりしていて、腕毛引つ張ったら痛かった……けど夢だよね。

夢に違いない。

夢、夢。

「よし。二度寝だ」

——何がよしなの？

雲だか霧だかの中に、誰かの声が響く。エコー利かせたマイクでしゃべっているような、だけどそんな電子音でもないような。

背筋をツ、と汗が落ちる。

この雲だか霧だかの先にぼんやり見える川っぱいもの。遠くにあるそれを視界に入れた瞬間に言葉が過った。

「さんずの！」

——正解。

有名すぎるその名所にいつどうやって来たのか、さっぱり見当がつかない。

死、という言葉が浮かぶが、いやいやそんなのないと否定する。

それじゃあこの辺りは更に有名な。

「さいの！」

——河原だねえ、たぶん。

石積まないといけないの？ 鬼にいじめられちゃうの？ 一つ積んでは父のため……って、いややそれないわー。父ちゃんずっと前に死んでるわー。

俺一応ごくごく一般的なそこらのモブAとして日々を過ごしてきたと思うんですよ。人生の主人公はキミだ、とか熱いこと言われてもやだそれめんどくさい、と撥ね退けるような。

群衆の中に入ったら完全に区別がつかなくなります。

漫画になったらテンテンちよつちよと描かれます。

取り立てて得意なこともなく、目立つたところもなく、彼女も……いな……く……

——やーい童貞。

「ちがいますうー！ 学生時代にあまずつばい経験はしていますうー！ 魔法使いにはなりませんー！」

視界に広がる白いもやもやがずっと晴れていくと、川の手前に青年が立っていた。

白いシャツに白いズボン。顔立ちは普通の日本人。高校生か大学生か。知らない人だ。

妙にリアルな夢が続くな。どんだけレムっているんだ俺。

——やあ。

「こんにちは？」

——はい、こんにちは。

いやいやどうもどうもと互いに頭を下げると、青年は人のよさそうな笑みを浮かべる。全く記憶がない。逢ったことがない。

——というか、ここどこ。

——きみが思い浮かべたままを現した世界だよ。

綺麗だね、と青年が微笑む。

——まず落ち着いて聞いてくれないかな。

いつの間にか現れたテーブルセットに驚くが、取り乱すほどではない。

丸いテーブルの上には、ほかほかと湯気が上がる湯呑み。俺が紅茶より緑茶派なのを知つての所業か。

——あはは。そうだよ。

——な、なんだってー。

——悶々と考えるのはいいけど、しゃべってくれるかい？ 突っ込むなら盛大に突っ込んでね。ハリセンいる？

「ハリセンで」

——古い？ あはは。

背中が汗が滝のように流れる。顔に汗はほとんど出ない。女優なのアタシ——じゃなくて体質だ。この体質のせいで学生時代にマラソンをサボったサボらないで教師と喧嘩したつけ。いいおもうでー。

——まあまあ座ってよ。常軌を逸しない程度に制限はかけさせてもらっているから、今起きていることを冷静に受け止めて。

「ああ、まあ、いつもの俺なら大絶叫で逃げているところだな」

いろいろおかしいと理解しているが、だからといって慌てることがない。頭の隅が常に冷静で、落ち着けばあとと言ってくる。なんだこれ。

青年に勧められるまま椅子に座り、お茶を飲む。新茶の玉露かこれ。すげえ美味しい。

——それはどうも。君が美味しいと感じた味を再現したからね。

「あのね」

——はいはい。

「あのですね、あの、ええと、あの」

——落ち着いて？

「ふう、ここはどこかな」

——うん。君がイメージした死後の世界。

「シッ？」

——うん。神城タケル、享年二十八歳。死因は心不全、にしといた。

「シンッ」

——うん。寝たままぼっくり。

「ポッ」

死んだと告げられて、心不全と告げられて、何でとかふざけんとかドッキリだろこれとか、いくらでも叫べたはずなのに、声が出ない。

——無駄に慌てないように制限をかけているからね。落ち着いて……は、いるだろうから、話を続けるよ。君はね、世界……この場合地球という惑星の日本という国の横浜という地域で『消え人』候補の一人だったんだ。

「きえびと？」

——うん。消えても構わない、気にされない、困ったことにならない人。

「はあ？」

——普通の日常を送っていれば、誰もいきなり消えたら心配されるだろう？ だけど、君はそれに該当しなかった。

「そんな」

——だって君、昨日で会社を辞めたら？ 一年間世界を旅して回るんだと言って、そこその貯金で完全ノープランで退職。両親は既に他界。兄弟も親戚もない。彼女もずーっといない。友人はいるけど年に数度のメールのやり取りのみ。ここ何年も一人旅しかしていない。

「そう……ですけど」

——うん。まず会社を辞めた時点で、君は気にされなくなる。よほど優秀だったら別だけど、ごくごく一般的な社員。会社を辞めても損害はない。頼りにはされていた。でも同僚と深い仲でもなかったから、心配されることもない。飲みくらいには誘われるかもしれないけれど、一人旅をすると言っている時点で、連絡は取りづらくなるだろうなと認識されている。実際に取れなくても記憶は風化してしまうから惜しまれることもない。

青年に言われた通りだった。

ある程度の貯金ができ、学生時代からの夢だった世界遺産巡りを一年ほどしようと計画していたんだ。自分探しか成長とかそんな高尚な目的ではない。ただ面白そうだっただけ。もともと一人旅が好きだったしな。

会社では同僚と深く関わることはなく、薄く浅い関係。一人でも寂しさをあまり感じない性質なので、俺が突然死しても惜しまれることは……あまりない？ えっなにそれすごい寂しい人生なんじゃね？ って思われるかもしれないが、俺は気楽だった。

——そうそう。アパートの更新とか各種税金の支払とかあるかもしれないけれど、そこはほら、死んだからね。

「何で俺……」

——最初から説明するの？ やだよ。『消え人』候補だったからとしか答えられない。『消え人』

は他にも候補がいたけれど、こっちの都合で君が選ばれた。あとはそうだなあ……持病もないし健康そのもの。心臓も力強い。器に障害がなければ魂も強くなる。性格も悪くはない。捻くれてもない。人を殺すのは悪いことだと認識できるし、困った人がいれば助けてあげたいという気持ちもある。精神もごく一般的。つまり普通の人間。

それはつまり、その他大勢の中にいる一人ってことだよな？ 普通を連呼するな。悪いことじゃないだろうが。

普通に生きてくれば法律のこともわかるし、人殺しがご法度であるのは当たり前のことだ。怖い願望もない。家庭環境が劣悪な中で育った人間ならば性格も卑屈になったりするかもしれないが、過ちを犯した際のリスクを考えれば後々面倒なことになるだろう。面倒だから犯罪をしない。その程度の考えだ。特定の宗教を妄信しているわけではないが、誰かが見ているかもしれないから悪いことはしないでおう、という考えはあるぞ。

俺にできる範囲ならば困った人を助けてやろうと思うけど、休日に遠出してボランティア活動するほど優しくはない。自分が満たされてこそ、他人への少しだけの手助けが基本。

——それでいいんだ。条件は普通の、一般的なよくある魂だからね。

「そこまで普通を強調するのか」

——大事なことだよ？

青年は優雅に茶を飲み干すと、またいつの間にか取り出した急須でお代わりを注ぐ。この色と匂いはほうじ茶だ。

「君は誰？」

—— やつと僕に興味を持ってくれた。名前はないから好きに呼んで。僕は太陽系を管理する者だよ。

「宇宙人？」

—— んー……ずいぶんとざっくりだけどそれでいいや。とにかく太陽系とその周辺の銀河を管理しているんだ。それで、別の宇宙から応援要請が来てね。ちよつと手伝ってあげているところ。

「なんだか壮大すぎて考えるのが疲れるな」

—— 宇宙で管理職しているとでも思っ

一気に庶民的になった。

—— あはは。地球の人間は神様とか言うかもしれないけど、僕そんなじゃないよ。神託もお告げも一切したことないもの。星が寿命を終えるまで見守って、時々いじくっているだけ。

「神様……つてもつと神々しくて恐れ多いと」

—— 神様も管理職に過ぎないけどね。

やめてくれ。神様のイメージを市役所のおっさんにしないでくれ。

—— あははは。例えがいいね、それウケる。それでね、他の宇宙にある「マデウス」って惑星にちよつと介入する必要があるんだって。その星はいくらいじくってみてもうまくいなくて、定期的に文明が滅んじやうらしいんだ。だから僕が少しだけ手を出すってことになったんだよ。珍しいことなんだけどね。

「俺にSF映画やゲームの知識がなかったら、ここで号泣して帰してと叫び狂っているな」

—— そうだろうね。だから君が良かったんだ。

「なぜ」

—— ものすごくじゃないけど、ある程度は知識があるでしょう？ そもそも地球で愛されている映画やゲームっていうのは、僕たちが少しだけ介入して情報を与えているんだよ。驚くかもしれないけど、地球で生まれた物語、寓話（うた）というのは宇宙のどこかの星であった史実なんだ。

「うわまじか！ 宇宙戦争とかあるのか！ 青色星人とか昆虫惑星とか戦闘民族とか！」

—— うんうん。

「御伽噺（おとぎばなし）もか？ かぐや姫や……赤頭巾ちゃんとか？」

—— そうだよ。それでね、マデウスっていう星は地球とまるで違う環境にあるんだ。いわゆる君が想像する、剣と魔法の世界。

宇宙はとにかくデカいから、どっかにはそういう世界があるだろうと妄想していた。妄想くらい誰でもするだろう？ 実際にあるのだと言われても信じられるかは別だとしても。

しかし、地球で生まれた物語はどこかの宇宙で実際にある史実……なんて。なんかこう、燃えるな！ あの映画とかゲームとかアニメとか、全部実際に本当のことと言われたら、燃えるな！！

—— 特に『消え人』候補にはそういった知識をつけてもらうようにしているんだ。まあ、興味を持たなかった時点で候補からは外れるし、逆に異世界に行きたい願望が強すぎる対象も外れる。

「どうして」

——実際に送り込んで、世界をめちゃくちやにされた前例があるからね。

頭張りすぎて空回りした、ということか。

——そうだよ。

「それで、俺はあの川を渡ればいいのか？」

——あんなの君のイメージに過ぎないよ。そうじゃなくて、マデウスに行つてほしいんだ。

「……………はい？」

——うん。あの世界に君という名の雫を垂らす。穏やかな水面に落ちる一滴は波紋となり、時には世界を全て変えるほどの大波となる。君にはその一滴になつてもらう。

「え。なつてください、とかじゃなく？」

——これは決定事項だよ。だつて君、もう死んじやつたし。ぽっくりぽっくり。

「ぽつく……実感ないんだけども」

——今は精神体だからね。

「そのまま極楽浄土でキャッキャウフとか」

——あはは。あるわけないよねそんな場所。マデウスに行かないのなら、君の魂は消えるだけだよ。そこでおしまい。君という個はなくなるだけ。さよなら。

「いやでも、いきなりそんなこと言われても、ほら、いろいろとやり残したことが」

——最終回を迎えていない漫画のこと？ あれの最終回はピーーがピーーになつてピイイで終わるんだよ。

「そんなあつさりと言うなああー！ー！」

——一人旅するつもりなら、地球だろうとマデウスだろうと同じでしょう？

「だいぶ違うと思う！」

——地球でだつてウツカリすると殺されてしまうことだつてあるんだから。痛くて苦しくて悶絶しながら最期を迎えるよりいいじゃない。

いきなり死んでいきなり他の星（？）に行つてこいと言われて、はいはいわかりましたと言える人間は普通じゃないと思う。日々異世界にトリップしたいと懇願している人ならともかく、俺は違う。ピラミッドやナイアガラの滝を見る予定なのに。

「明日は溜まった洗濯物を片付けるつもりだったんだ！」

——死んじやつたからもう必要ないよ。遺品は処分される。

「……………！ クローゼットの中の！」

——それと、HDDにある大量のデータは消去しておいたよ。

「お、俺の、お宝!!」

——運命つてやつです。

——なにその強引なの！

——もちろん身一つで行かせるわけないよ。そんなことしたら、人里にたどり着く前に下級モンスターに殺されちゃうからね。

「モンスターいるの？ 俺、殴り合いの喧嘩すらししたことないんだけど！」

——わかつてるって。だから君が望むだけの異能^{ギフト}を与えるよ。いわゆる祝福ってやつだね。

「いきなりゲームっぽくなつたな」

——わかりやすいでしょう？

日常がいきなり終わったと宣告されても、納得はできない。

だが、俺の中で既にマデウスとやらが気になりはじめていた。普通に日常を送るのもいいが、そんな生活の中でほんの少し望んでいた非日常。

それが送れるかもしれない可能性に、興味がないとは言えない。

「例えば、どういう贈り物とやらをくれるんだ」

——まず言葉。当たり前だけど日本語じゃないから不便でしょ？ 不便どころじゃなくて、言葉が通じないだけで死んじゃうこともあるからね。

「そうだな」

——種族ごとで言葉が違うんだけど、マデウスに住む言葉を発する生き物の言語なら全て理解できるようにしておくね。もちろん、文字も読み書きできるように。

「異能^{ギフト}」世界言語

「それはありがたいことだ」

——うん。それから身体能力も向上させておこう。

「病気になるにくくしてくれるとありがたい。筋肉痛で動けなくなると困る」

——そうだね。毒耐性、麻痺^{まひ}耐性、各種免疫もつけておこうか。これで大怪我^{けが}を負っても後遺症や障害が残らないようになるよ。

「大怪我は負わないようにしてくれ……」

——あと恐怖耐性、免疫。見境なく叫びまわらないように、心を平穏に保てるように、冷静さを向上、と。これ、けっこう大事だよ。

「異能^{ギフト}」身体能力 各種免疫・耐性

「無一文は困る。それと、今までの貯金が残ってる……」

——現金を持たせることはできないな。うーんと、探査能力もつけておこう。探査魔法を展開して素材を探し、それを素材屋とかで売ればお金になるからね。貯金は……800万ね。うん、それに見合う価値のあるものを見つけれられるようにするよ。

「鞆^{かばん}……とか持たせてくれるのか？ いろいろ入れられる便利な感じの」

——俗に言うアイテムボックス？

「それだ。なるべく制限がないほうがいい。ある程度の重さと大きさがある鞆」

——そこらへんによくある鞆に見えるようにしよう。生きているものは入れられないけど、植物ならいいかな。液体は何かに入れたら保存できるようにしておくね。食べ物もタッパー保存なら腐

らないようにしておくよ。

「タッパーなんてあるのか？」

——ああそっか。それじゃあ、何かで包めばいいよ。パンとか惣菜とか、生身で持ち歩くことはないよね。

「誰かに悪用されないように」

——君以外には使えないようにするよ。もし紛失してもすぐに戻ってくるように。

「異能」 探査能力 空間術 私物確保

「魔法は使えるのか？」

——魔力極限ね。即座に理解できるようにイメージ具現化を向上。ゲームでよく使われる便利な魔法も使えるように。制限はあるけどある程度は使えるから。先人に習ってもいいけど、独学で使えるようにしておこう。これで知識力も向上。

「異能」 魔力極限 具現化能力 知識理解力

「動物に嫌われないように」

——血に飢えた獠猛なモンスターは無理だよ？ でもまあ、ある程度なら好かれるようにして

おこう。流石に言葉まではわからないけどね。

「異能」 意思疎通

「魔王を討伐する勇者にはなりたくない。でも余計な火の粉を払えるだけの力は欲しい。最強の剣豪じゃなくて、喧嘩に勝てるくらい」

——あはは。勇者なんていないから大丈夫。雑魚くらいなら瞬殺できるから逆に気をつけて。あとは何が必要だろうか。

言葉が理解できて、便利な袋があつて、魔法が使えて、ちょっと喧嘩もできて……

「可愛いパートナー！」

——守られるだけの貧弱なのより、むしろ守ってくれるほうがいい？

「ある程度守ってくれるくらいは」

——うん、大丈夫。すぐに逢えるわけじゃないけど、時期が来たら逢えるよ。

おとお……まさか異世界で可愛い子に逢えるとは……

——探査して素材採取して売り払えばお金になる。これで日々の生活は送れるね。魔法はイメージ次第でいろいろと応用が利くから試してみてね。おっと、少しの幸運もつけておこう。悪運が強いよりも幸運がいいね。いいことあるよ。

「人外とか魔物とかになるの？ 俺」

——ううん。人間として、あの世界では生きやすいようにしておく。

青年の姿が薄れていく。

三途^{さんず}の川がぼやけていく。

——えーと、他にはないかな？ あれもつけたしこれもつけた……………あつ。

あ？

——つけすぎたかもしれないこれ……

え？

——やばい。幸運を削る？ それより魔力……なんで極限にしたの僕。えっ？ パートナーそれになるの？ ……大丈夫かなあ。

おい？

——まあいつか。頑丈だしちよつとやそつとでは傷つかないからいけるいける！

なんか嫌な予感するんだけどー？

——あつ、第六感までついちゃった。これもいいよね。それじゃあ神城タケル。君はマデウスを旅し、世界を回り、世界を見てくるんだ。僕からの制限は特にないけど、むやみやたらと大量虐殺^{ぎゃく}はしないだね。まあ理由があるなら許容するけど。でも後々面倒なことになっちゃうから、そこはよく考えて。

なに言ってるんだおまえ!!

——君の一生を君らしく精一杯生きてくれ。

もう一回オーダー確認してくれないのかよ！

——大丈夫。君なら大丈夫。

2 魔法は地味でした

眼を瞑^{つむ}ったのはほんのわずか。

肌で感じる空間の変化。

河原^{あそこ}じゃないどこかに立っている感覚。

風が髪を撫^なで、小鳥が囀^{さえず}る音。

背に伝わる温かな陽^ひの光。緑のにおい。

「はあ……」

眼を開けて、広がった世界に思わず息を吐き出した。

見事な緑の草原がどこまでも続き、青々とした木々が生^おい茂^{しげ}る林が各所に点在。

空は青く澄み渡り、雲は白く雄大に泳ぐ。

太陽の位置でお昼前だとわかるが、あれが太陽でいいのだろうか。太陽ってのは眩^{まぶ}しい点にしか見えなかったはず。

何あの輝く土星みたいなかいの。

ここが青年の言っていたマデウスという星なのだろうか。

よかった、白塗りの山賊がヒッツハーしている岩と砂だらけの世界じゃなくて。

太陽は土星状だけど太陽だとわかるし、月……は見当たらないけれど、夜になれば出てくるかもしれない。

見知らぬ場所に身一つで落とされたわけだが、慌てることがなかった。妙に落ち着いてあたりを見渡すことができるのは、地球と違うところがあるからだろう。

足元の草は膝を隠す程度の長さ。ススキみたいだ。

俺は茶色いブーツを履いている。つま先と踵に金属の補強がしてある、見た目は革のブーツ。こんなブーツ買った覚えはないから、俺が今身に着けているものすべては、あの『青年』が用意してくれたんだろう。

それにしても。

「かつこいいぞこれ……」

金属部分は黒ずんでいるが、細かい模様が刻まれている。

使い古されたというより、長年愛用されているようなダメージ加工。すごくかつこいい。見た目に反してとても軽い。

ズボンは黒い革パンかこれ。

ライダーみたいだな。ストレッチ素材で伸縮性抜群。これも膝部分が土で汚れているが、穿き心

地抜群だ。ちんぼじバッチリ。

ファンタジーのお約束、ローブを着ている。黒茶の地味なローブだが、触り心地がいい。ふわふわした上質なシルクコットンのようだ。端の部分が金糸で縫われ、細かな刺繍がされている。これもまた凝った作り。

厚手の黒いハイネックシャツ。

その下に着ていたインナーはろろで光沢のある白。

何でろろなんだと引つ張ってみたら、これが防御力の高いミスリル銀糸で編まれた防具だと気づく。なぜそう思ったのかはわからない。ただそうだ、としかわからなかった。

視界に入る髪は黒。前髪と後ろ髪が少し伸びすぎている。髪は黒なのか。それじゃあ眼は何色なのだろう。真つ赤とか左右で違ふとかやめてくれよ、格好いいと思わないからな。

「鏡は……」

右手に持っていた茶色いシオルダー状の鞆。何の変哲もない通学鞆のようなそれを開くと、真つ黒い空間が広がっていた。

一度閉めて、再び開く。

なにこの暗黒空間。

これが空間収納術、いわゆるアイテムボックスなわけか。

恐る恐る手をつ込んでみると、脳内に一気に情報が流れ込む。

ステータスウィンドウを展開したときのように、入っているものが種類別に小分けされているの

がわかる。お洒落女子じゃないんだから鏡なんてあるわけじゃないかと思っていたのに、手に触れたのは手鏡。何で持っているんだ俺。

木製の手鏡を手にし、自分の顔を映す。

「うおう……」

俺、ではなかった。俺ではない誰かの顔が映っている。面影すらない。

どっかの国とどっかの国となにかの人種をシャッフルしてミックスした顔立ち。つまり、例えられない外国人顔。

髪は漆黒で、両眼は空色だった。

青というよりも、蒼。黒目じゃない目を見るのははじめてで、しばらくほーんふーんと言いながら見入ってしまった。若い。

『俺』よりも十歳くらいは若い気がする。髪が伸びているから全体的にもっさりしているが。

一通り自分の顔を観察し、醜いわけでも突き抜けて美形というわけでもない、だけど美形って言っちゃうよ、といった感想を持つ。

前の俺よりもイケてやがるのは少々腑に落ちない。

だって背が高い。たぶん。

そして手足も長い。腹、憧れのシックスパック！ 脱いだら凄いです系の肉体美なのか！ 股

下何センチだこれ！

そしてムスコは………Oh……マグナム……

草原の真ん中で、マイサンを確認している場合ではなかった。

この星、マデウスは剣と魔法の世界だと言っていたから、獰猛なモンスターもそこらにいるはず。旅人装束なのはいいが、有効な武器は装備していないようだ。

再度鞆に手をつ込み、脳内リストを確認。

ナンチャラの剣とかナンチャラの弓とか、そういった武器になるようなものが入っていない。鉄のフライパンは武器にはなりそうだが、それは最終手段にしたい。

あるのは「防寒具、数着の着替え、野営用品、手鏡、毛布、布、袋×10、小袋、水袋、干し肉、黒砂糖、枝……」。

枝？

「ユグド、ラ、シルの……枝？ 何だユグドラシルって」

ゲームや漫画で聞いたことのある名前。確か別名で世界樹……とかいう。どこかの世界を支えているでっかい樹、としか知らない。

手にして鞆から取り出すと、何の変哲もない木の枝だった。

指先から肘までの長さ。

こげ茶色の木肌は光の加減で時々キラキラと輝く。途中で枝分かれしており、緑色に白い斑点が

ある葉っぱが一枚ついていた。

もしやこれが世界樹の葉？ と感動したが、いやいや武器にはならないだろうと肩を落とす。せめて鉄パイプとか釘バットとかあれば自衛ができるのに。

しかし見渡す限りの草原で、頑丈な木の枝も落ちていなさそうだ。

それならばと歩を進める。

人間の集落を探そう。旅慣れてはいるが、バックパッカーの経験はない。見知らぬ世界で野宿する勇氣はちょっとないかな。

どちらに進めばいいのだろうか。街道があればどちらかに歩いていけるのに。

「こういう時こそその枝か」

足元の草を踏みしめ、枝が倒れるくらいのスペースを空ける。

枝を地面に立て、そっと指を放す。

枝はふらふらしながら倒れた。

「太陽があつちだから……こっちはたぶん……南で、あつちは北。よし」

枝の指し示す南に向かうことにする。太陽の位置と方角が合っているかはわからないが、これはまあ気分の問題。

風は穏やかだし日差しは暖か。

四月の晴れた日に似た陽気。

桜が咲いていたら絶好のお花見日和だが、忘れてはいけない。ここは異世界。既に鞆の中に虚無

が広がっているのを確認したため、ここが異世界であることに間違いはない。腕毛も引つ張って痛いことは確認済み。ちよつと部分ハゲができた。

太陽は相変わらず土星の形。

目的地がわからないままただ歩く、というのははじめての経験だ。夜が更けるまでに人里を見つけたいが、まあなんとかなるだろうという気持ちのほうが強い。

足早に草原を歩いているのに少しも疲れない。息も乱れないし疲労感もない。身体がものすごく軽い。空気はうまいし日差しは気持ちいい。

なんならスキップもできちゃう、らんらんるー。

＋　＋　＋　＋　＋

タケルは気づいていなかったが、『青年』が付与した祝福は、常識を超えたやりすぎなくらいやりすぎたものであった。

言語能力「世界言語」を持っている時点で、俗に言われる異常者に該当することを、もちろんタケルは知らない。

異能^{ギフト}ではなく、異常。

ありえないこと。

いくら言語学者であっても、世界各国、各地域、各種族の言葉が全て理解できるわけではない。

この世界の優秀な言語学者であっても理解できるのはせいぜい六ヶ国語程度。言語異能と呼ばれる潜在的技能を生れもった者でも、やはり全ての言語を理解できるわけではない。

「身体能力」向上により普通の人間の数百倍の力を持ち、風のように走り、高く跳ね上がることができる。

「毒耐性」「麻痺耐性」「各種免疫」の付与で、既にタケルは人間という枠から大いに外れていた。

「恐怖耐性」によって慌てふためくことはなくなり、恐怖に震えることもなくなった。一見クールに捉えられるが、裏を返せばただのムツツリである。

「探査能力」はその名の通り探査する力であり、応用して探査魔法を展開することができる。これは価値のあるものを探し当てる能力で、秀でた探査能力者が探査を専門としたごくわずかな専門家にしか扱うことができない。

「魔力極限」はバカみたいに膨大な魔力を持つ者の特別な異能であり、魔力が全ての根源となるこの世界では何より重要視されるものである。ちなみに、バカみたいに膨大な魔力を持つ者を英雄とか魔王とか災厄などと呼ぶことがあったりする。

『青年』は自分の都合で死なせてしまったタケルに、微々たる罪悪感があった。

なので、言われたまま能力を与えたが、どれもこれもが全て一級品の能力になるとは思わなかったのだ。

ちょっとだけ強い冒険者になれば生きるのはらくちんだよね、くらいにしか考えておらず、あれこれと付与した結果――

地球ではその他大勢の一人に過ぎなかったタケルは、惑星マデウスでは災厄級のとんでもない生き物に進化してしまったのであった。

その事実をタケルは、まだ知らない。

+ + + + +

「お！」

俺は 村っぽいものを はっけんした

らんらんスキップ無双をしまくった結果、気づいたら街道に出ていた。

道はどこかに通じる。ということ、そのまま気軽にランニング。

いくら走っても全然疲れないから調子に乗って走ってしまった。すると、太陽っぽいものが頭上に来る頃、人工的な建造物の群れが目に入った。

ところどころ白い煙が空に昇り、かすかに子供の笑い声が聞こえてくる。高い建物は見つからないので、村とか集落とかそんな感じなのだろう。

さて、このまま村を訪れても不審者と言われないだろうか。石を投げられないだろうか。

小綺麗こぎれいな格好きかくをしていると思うし、顔を背そむけたくなるほどの不細工ぶさいくでもない。体臭……よくわからん。背は高くなつたが、異世界ではこのくらいの背が平均的なものかもしれない。

そういえば、鞆たもとの中に金銭はなかった。あの青年は、無一文だけど何か探して売り払えとか言っていた気がする。だが、何が金になるのかわからない。

何かを探せばいいのだろうけど、何をどう探せば。

探査能力とか探査魔法とか言われたような気がする。

憧れ……でもないが、人間一度は夢見たことのある魔法使い。使い方はさっぱりわからんが、何か呪文でも言えればいいのか？

「探査……ええと、探査………うん、探査ササか」

思いついた言葉を発すると、視界に数々の光る点が現れた。

赤、白、緑と色が様々で、一番近くにあった緑の点に近づくと、生い茂る草の合間に黄色い花を見つけた。

憧れの魔法だが、ずいぶんと地味だった。もつと光がキラキラ、シャランシャランするものだと思つたが何もない。地味。

ともかく他にも青い花や黄色い花はあるが、緑の光がここだと主張するのはこの花だけ。他と何か違うのか？

「こういう場合は更に細かく調べるんだよな。そういう場合は……調べる……調べる……調査する？ 調査スキャンだ」

【月夜草 ランクB】

三日月の夜に芽吹めふくと言われている黄色い花。花の蜜みつは精霊の好物で、疲労回復に効く。

すり潰せば傷薬になる。

「備考」一般的に市場に出回る薬草ではなく、高位回復薬の材料となる。生息地域はまばらであり発見が困難。

ほほう。

脳内にひらめく情報。忘れていたものをふと思い出したときの感覚に似ている。いちいち図鑑などで調べなくて済むから、これは便利な魔法だ。

だが、地味だ。

異世界転生、はじめての素材採取がランクB。そこそよろしいんじゃないですか？ このランクっていうのがわからんが。

一体いくらで売れるのか。せめて一食分になればいい。

つまりこの視界に見えた光るテンテンは、こういった素材の場所を教えているということか。それで、探し当てたものに調査スキャンをかければ名前と使い道、ランクなどがわかると。うんうん、便利だ。緑が植物なら、赤は……石？

足元の石を拾い上げると、つるんとまるんとした川原の石のようだった。川はないのに丸い石。



続けて調査を展開。
スキャン

【ハンマーアクリイの糞^{ふん} ランクC】

粘着質な物質を体内で作り出すハンマーアントを捕食するアクリイのうんこ。粘着力があり、水に溶かすと強力な接着剤になる。
建材として重宝^{ちようぼう}されている。

「うんことか!!」

石かと思ったらクソでした。

だが、ランクCなので投げ捨てるわけにもいかない。見た目も触った感じも石にしか思えないのに、うんこかこれ。このまま鞆に入れるのもなんか嫌だな。「袋×10」つてのがあから、その一つに入れてくか。

うん、鞆の身に「袋1…ハンマーアクリイの糞×1」と、表示が追加された。鞆の中の「袋」はパソコンのフォルダのようなものか。

うんこが赤表示ってことはないよな。他の赤表示は緑と白に比べて極端に少ない。それじゃあ白表示は何かと近づくと、ごつごつとした黒い石が転がっていた。

【鉄鉱石 ランクD】

需要はあるが珍しくもない鉱石。鉄素材。

白表示は鉱石なのか？ 赤と白の違いがいまいちよくわからないが、追々調べていけばいいだろう。ともかく花とクソと石は見つけた。せめて一食か二食、贅沢を言えば今夜の宿代になればいい。最初はボられてもいいから、現金を手にしたい。さて、村に行ってみますか。

3 本より高い○○○

「おや珍しい。旅人かね」

緊張しながら集落に近づくと、簡素な門の入り口に槍を手にした男が立っていた。古びた鎧を身に着けている。すぐくファンタジーっぽいぞ……

陽に焼けた浅黒い肌をした男はにこやかに話しかけてきた。言葉がわかる。良かった。

「こんにちは。こちらは何という集落ですか？」

「ここはトルミ村だよ。ルセウヴァツハ領ベルカイムの北、田舎も田舎、ド田舎さ」

自らド田舎と胸を張るとか。田舎を連呼するわりには、戸建が多数隣接している。屋台もいくつもあり、人もたくさん住んでいるようだ。

「気を悪くしないでほしいが、これも仕事で聞かなくてはいけないくてね。兄さんは何の用事があつてトルミ村に来たんだい？」

これは必ず聞かれると思い、前もって返答を用意しておいた。

「俺はタケルって言います。一人で気ままな旅をしています、路銀が底をついて難儀しています」

ちよつと時代劇よりな話し方だが、このほうがよりらしいだろう。

失礼のないよう、丁寧にお行儀良く。

「やはり旅人かい。冒険者と迷ったが……この村に冒険者が訪れることはほばないからな。見たところ戦士か剣士なのか？ えらく………大きな」

「えーと、素材とか集めて売ってます」

「ほう、素材採取専門家かい！ こりゃあまた珍しい」

いや専門家とか誰も言ってますよ。

「俺はマーロウ。トルミ村自警団の一人だ。ここには名所はないが、旅人を癒すことくらいはできる」

「それは良かった」

「素材屋は生憎とないんだが、雑貨屋なら一つある。ジェロムの店だ。素材なら何でも扱ってくれると思うから、そこを訪れるといい」

「わかりました。ありがとうございます」

「いいってことよ」

異世界第一村人がいい人で良かった。不審者あつち行けバーカとか言われなくて良かった。門らしき柵を通り抜けると、行き交う村人の視線が集まった。ド田舎だと自負していたから、俺のような旅人は珍しいのかもしれない。

古き良き昔の風景。剣と魔法の世界なら、科学文明より魔法文明が発達しているのだろうか。見た限り機械で動いているようなものは見当たらない。土の地面。土壁と木の家。井戸も奥にある。周りに畑が見えるから、農業で生計を立てているのかも。

「兄ちゃん知らない顔だ」

「ほんとー誰ー？」

「でっかい！」

「父ちゃんよりでかいねー」

さて雑貨屋はどこかとキョロキョロしていると、小さな子供がわらわらと集まってきた。俺の膝くらいしか身長がない。凄く小さい子供なのか、これが平均なのか。

子供に好かれるような風貌じゃなかったはずだが、子供らは皆興味深げに笑っている。子供に嫌われると大人にも警戒されてしまうと思い、ここは懐柔策に出しておく。

腰を落として顔を下げ、子供らの視線に視線を合わせ、俺はニカリと笑う。

「俺はいろんなところを旅して回っているんだ」

「たびびとさん」

「ああ、旅人と言われるな。だが名前はタケルと言う」

「タケル兄ちゃん」

「タケル兄ちゃん」

もともと子供らが懐っこいのか人見知りをしないのか。子供らは遠慮なく俺の背や肩をべたべたと触ってくる。ちょっと匂うが、子供ならではの汗の匂いなので不快ではない。

「トルミの村ははじめてなの？」

「ああ。雑貨屋を探しているんだが、どこにあるのか教えてくれるか？」

「いいよ！ おいらが案内してやるよ！」

「リックずるい、あたしも案内できる！」

「おいらがするんだよ！」

俺の何が子供たちの琴線に触れたのか、子供らは俺を巡って熱い戦いを……

とまではいかないが、年長者っぽい子が幼児を邪魔者にしようとしている。これはよろしくない。

俺が保護者から嫌われてしまう。

「こらこらこら、喧嘩するな！」

「ぎゃああーっ！」

「うひゃあああつ!!」

今にも掴みかかろうとしていた両隣の子供らを抱え上げ、そのまま肩に乗せる。ふわりと軽い子供らは、なんら苦もなく肩に担ぎ上げることができた。

「うつひやつひやひやひや！　すげえ！　たっけえー！」

「すごおい！　メルベル、すごい高いわよ！」

「いいなあアンナ、あたしも抱っこしてえー！」

あつという間に担ぎ上げられた子供らは、怖がるどころか手を叩いて喜んでいる。お仕置き程度に驚かせたつもりが、逆に喜ばせてしまった。

俺に注目していた大人らは慌てていたが、子供らが喜ぶ様を見てほっとしたようだ。

「ほらリック？　だったか？　雑貨屋に案内してくれよ」

「うひゃひゃ！　兄ちゃんすげえんだもん！」

「そうか？　まあ……背はデカイほうかもしれないな」

自分の身長はこの世界の平均的背丈くらいだと思っていたが、違ったようだ。

先ほどのマーロウも俺の胸の胸の位置に頭があつたし、道行く人たちも俺より背の高い者はいなかった。

笑い転げる子供らを抱え、腕にぶらさがる子供らを引き連れる俺は相当目立っていた。

咎める人がいないので、そのまま両手両足に絡ませたまま歩く。

移動ジャングルジムか。

友好的で子供にも好かれる旅人さんですよ。これで村人たちの警戒心は薄くなるだろう。たぶん。

笑ったままのリックに案内されたのは、村の中心部にある広場近く。屋台が並ぶ一角に目当ての雑貨屋はあつた。はしゃぐ子供らを何とか宥め、店の前で散会。

「こんにちは」

薄暗い店内に入ると、漢方のようなお香のような独特の匂いがした。

所狭しと大きなガラス瓶が壁に並び、中に何かが詰められている。天井から鍋やフライパンが吊られ、シャベルやつるはしのようなものもあつた。

なるほど、雑貨屋というか何でも屋というか。テーマパークにあるような部屋だが、これは現実。なんか顔がにやてくる。

カウンター奥から、恰幅のいい髭面の男がのそのそと出てきた。

「はい、らつしやー、い？　兄さん、見たことのない顔だな」

「こんにちは。旅をしている者です」

「ほうほう、それは珍しい………何か探しているものでもあるのかい？」

何が必要なのか今はわからないので、まずは拾ったものを売ることが先だ。
鞆の中から、一番いらぬものを取り出す。

そう、うんこだ。

「すみません、こんなんでも売れます？」

えんがちよとつまんだブツを店主に見せると、店主はそれをひよいと素手でつまむ。しつこいが、うんこだ。

「うーん？　うん？　ほう、ほう、ほーう！　ハンマーアクリクの糞か！」

「はい……」

「形も強度もいいな、色もいい。兄さん、こんなによく見つけれられたな」

そこらに落ちてましたけど。

「売れます?」

「もちろん! これは売ってくれとこちらから言うところだ。こんな状態のいいものは久しくお目にかかっていない。そうだな……他に売られても困るから、銀貨五枚でどうだ!」

そうドヤ顔されても相場がわかりません。買値^{かひ}を言ってくれたんだろうけど、いくらくらいになるんだ。だつてうんこ売った額だぞ?

「ええと、この村に宿つてありますよね」

「ああ、はず向かいのギャロップの宿だ。村には宿がそこしかねえ」

「宿代つて一晩いくらになります?」

「500レイブだな」

れ、れいぶ? レイブつてのが円とかドルつていう貨幣の呼び方? うんこが安いのか宿代が安いのかわからんな。

「銅貨十枚と青銅貨九枚と銀貨四枚にバラけて渡したほうがいいか?」

お。銀貨五枚が、銅貨十枚と青銅貨九枚と銀貨四枚になると……うーんややこしい。

で、ともかく通貨単位がレイブ。

「すみません、貨幣を扱うのが久しぶりで……ええと、宿代の500レイブつていうのは貨幣で言う……どうなります?」

「うん? アンタ相当な田舎から来たな。ははっ、まあいいさ。銅貨五十枚か青銅貨五枚だぜ」

銅貨五十枚で500レイブ。ということは、銅貨一枚が10レイブ、青銅貨一枚が100レイブということか。さっきの話を踏まえると、銀貨は1000レイブだな。

つまりは……宿代よりもんこのほうが高いのか?

自称ド田舎な宿の相場がいくらになるのかわからないが、日本だと安くても5000円以上した宿泊施設。ということは、1レイブは日本円で10円くらいになるのだろうか。

すると宿代が5000円くらいで、うんこが5万円? しつこいようだが、アレうんこだぞ!?

「それで、いいです。どうも……」

「よっしゃ! お互にいい取引ができたな!」

店主は嬉しそうにうんこに頬ずりしている。気づけそれはうんこだ。

ばっちいものを見る目を我慢し、用意してくれた貨幣を受け取る。鞆の中にあつた小袋にそれを入れたらちょうど良かった。

続いて鞆に手突つ込む。

「これはどうですか?」

「うん? これは……鉄鉱石か。鉄含有量がそこそこあるようだな。うん、いい品だ。銀貨三枚でどうだ?」

日常の必需品に化ける鉄が、うんこに負けた瞬間だった。

どんだけ貴重なのかあのうんこ。

「それをお願いします」

「兄ちゃん、状態のいいもん持っているんだな。他にもなにかあるかい？」

「えーと、それじゃあ……」

ランクBの月夜草を土ごと取り出す。どこを採取すればいいのかわからなかったので、根こそぎ持ってきた。

「なぬっ!? そりゃあ……月夜草か? いやまさか……むむ……確かに月夜草だ」

「そうらしいですね」

「こんなに大振りなものはじめて見た。これはどこに咲いていたんだ？」

「街道を北にずっと行った草原です」

「ベラキア大草原か。っはー、あんなところにも咲いているたあなあ。しかし今採取したばかりのようだな。どうやって持ってきたんだい？」

「鞆に詰めて？」

「は? ……………空間収納袋? いや…………でもまさか……………! こりゃあなんてこつたい!

兄さん、異能持ちかい!?」

鞆を広げて見せると、何もない漆黒の空間。それを見た店主が飛び上がるほど驚く。

それほど驚くようなことだったのか?

「こりゃ驚いた……………空間術の異能持ちなんざ、それこそ久しぶりに見たぞ」

「はあ」

「すまん、こんなに驚いちゃって。話には聞いていたんだが、兄さんのような能力があるもんは大抵王都近辺を根城にするもんだろ? 何でこんなド田舎に来たんだい」

店主は震える手で月夜草を売り物らしい木のカップに入れ、それを眺めながら尋ねてきた。

「俺のほうこそ辺鄙な森の中に住んでいましてね。都心部の情報なんて一切入ってこない、外界から閉ざされたところで自給自足の生活だったんですよ。それでまあ外の世界を知りたくなりまして、旅をしているわけです」

「森の住人かい」

「超、ド田舎でした」

「はははは! でかい森はそれだけ訪れるもんも少ないと聞くからなあ。もしかして……兄さんはその異能のことを詳しく知らねえんじゃないか?」

「恥ずかしながら」

店主は呆れながらも語気を強くして説明してくれた。

異能は、技能と違って生まれもって授かった祝福なのだという。異能持ちが生まれる確率は一万人に一人とも百万人に一人とも言われ、誰しも持っているわけではない。グラン・リオ大陸一賑やかなアルツェリオ王都にある魔法技術学院にすら、数人いればいいほう。異能力者を集めた団体もあり、それは国すらも動かせるほどの発言力があるらしい。

ちなみに店主は人を見る目が普通の人より優れており、初対面の相手でもどんな性格なのか大体わかってしまうのだとか。それは長年の経験と潜在的な技能によって生み出された特技のようなも

のなのだという。

「田舎モンなら便利だなーで終わる話だが、ここより更に南に行ったベルカウムでは話が違う。兄さんの能力を利用しようとするヤツがいるだろうよ。怪しげな団体に勧誘されたりするかもしれないねえ」

「なんか怖いですね」

「それだけ異能力者、異能^{ゼント}持ちつてのは珍しいし貴重なんだよ。俺は大昔、兄さんのような空間を操る異能力を見たことがあるからわかったけどよ、こう見るとその違いがわからあ。そいつの異能力なんかより兄さんの力のほうがすげえ。魔道具^{マジックアイテム}にも空間収納袋^{アイテムボックス}つてえのがあるから、一見するとそれを持っていると思われることのほうが多いかもな」

「アイテムボックスですか」

「そうだ。だからといって異能力者だと言って回るのは止めておけよ。兄さん、人がよさそうだから利用されそうな気がするぜ」

「気をつけます」

「魔道具^{マジックアイテム}については……そうだな、ここらにある……この本でも読んでおけば基本がわかる」

店主はカウンターの下に潜り込み、古びた一冊の本を取り出した。

背表紙には『事典』と書かれている。数年前に作られたものらしいが、大体の言葉の意味が載っているようだ。これはありがたいことだ。

「銀貨二枚しておいてやるぜ」

魔道具^{マジックアイテム}のことがわかるならば、とそれを銀貨二枚で購入した。商売上手め。

本よりうんが高いのです……

4 風呂が、ない!?

「兄さんはいつまでトルミにいるつもりだい？」

「世間の常識に疎^といですからね。都心部を目指す前に、この村で一般常識を学ばせてもらいますよ。なので、しばらく滞在させてもらいます」

「ははははっ、こんなド田舎で何が学べるかわからんが、皆気のイイやつらばかりだ。俺も含めてな！」

「そのようですな」

「あつはつは！ いいねえ、兄さん気に入った!!」

初対面のかい男がやってきても、嫌な顔をせずに歓迎してくれた。この村が危険と隣り合わせと言うのなら、村人たちはもつと警戒心むき出しでくるはず。おそらく警備網^{ばんじく}が磐石^{ばんせき}なのか、それほど危険な目には遭わないのか。村を囲む柵は頑丈ではなかったので、きつと危険なことが少なく、平和なのだろう。

「俺はジェロムってんだ」